

畑地灌漑下におけるカンラン栽培について

第1報 品種および作式について

榎木輝男・今村 実

(鹿児島県農業試験場鹿屋支場)

ENOKI, T. and IMAMURA, M.

Effect of Irrigation on the Cabbage Growing

(I) Varietal and plant spacing differences

畑地灌漑下におけるカンラン栽培安定のために、1961年から畦間灌水による試験を行い、品種、作式について結果を得たので報告する。

(1) 品種について

試験方法

1961年～2年の2カ年にわたって、8品種を供試して検討を行なった。

61年は1区面積15m<sup>2</sup>の2区制、播種期は7月4日、定植は8月12日で初夏播型の栽培である。灌水は61年は30mmずつ、8回、62年は4回行なつた。

試験結果

1. 灌水の影響について

イ. 地温、62年の8月23日～25日にわたって、灌水区、無灌水区の地温の動きを調査した結果、灌水による地温低下がみられ、温度較差の日変化は、昼間(12時～3時)が大きく、朝夕は小さく、1日の最大較差1.4～0.5°Cの範囲であつた。

ロ. 腐敗病の発生は品種間に差があり、長岡交配早生、葉深は発生率が高く、久留米初夏播、久交103号(夏葉)は低かつた。腐敗病抵抗性の弱い品種は、灌水によって更に、腐敗病の発生が助長される傾向を示した。したがって灌漑栽培適品種の選定には、腐敗病

に強いことが、重要な要素と考えられる。

ハ. 生育および収量、灌水によつて、生育促進がみられ、外葉も繁茂し結球始が2日～3日、収穫期は4日～5日いずれの品種も早まつた。収量は第1図のとおりであるが、灌水による増収率は品種で異なり、安定した増収性を示す品種が灌漑栽培向の適品種と考えられる。

(2) 作式について

試験方法

供試品種、F<sub>1</sub>葉深甘藍 1区面積12m<sup>2</sup>の3区制、試験区の構成は、畦幅、株間、密度を組合せた7つの処理区を設けた。灌水は30mmずつ5回行なつた。

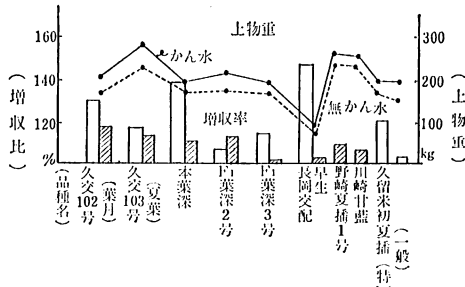
試験結果

収量は畦幅70cm、株間40cm区が、もつとも良好であつた。この結果を解明すると、土壌水分の動きは、高温期になるにしたがつて、無灌水区との水分較差が大きく、作式では畦幅(80cm)の大きいほど、水分効率が悪く、垂直分布が大であつた。外葉は粗植ほど繁茂が良好で球重も大であつた。上物重は球重×上物個数に支配され、上記の作式が高かつた。

むすび

以上の結果から、畑灌向適品種として、夏葉、作式は畦幅70cm、株間40cm区が良好と認めた。

第1図 上物重及灌水による増収率



第2図 上物重及上物重歩合

